

Vent

音楽教育 ヴァン

vol. 57

巻頭インタビュー〈上〉

覚和歌子 ことば 歌と詞

レポート①

令和6年度 全日本音楽教育研究会全国大会（合同大会）
第66回 北海道音楽教育研究大会
旭川上川大会

レポート②

花火の歌に思いをのせて

～弓削田健介さんと能登の子どもたちによる
「いのちと夢のコンサート」

参考楽譜

斉唱『ゆめはなび』

同声二部合唱『HANABI』

（作詞・作曲：弓削田健介／協力：能登と長岡の児童生徒）



伝えたいもの、残したいもの

「現存する最古の楽器」といわれている笛の写真が大学の授業で見せることがあります。ドイツ南西部にあるホーレ・フェルス洞窟から発見されNature誌(2009)に掲載された骨製の笛は、約3万5千～4万年前のもので推定されます。「現存する」と言うのは、人類が意図的にモノを使って音をつくる営みは、この笛よりも遙か以前に遡る可能性が高いからです。推測の域を出ませんが、まずは手近なモノを叩いたりして「音づくり」を始めたと考えるのが自然でしょう。いずれにせよ、人類には気が遠くなるほどの長きにわたる「音づくりの歴史」があることは間違いありません。

残念ながら私たちは4万年前の「いま・ここ」の音を聴くことは出来ません。「造形作品は永続的に残るけれど、音は消えてしまう」と嘆いたこともあります。しかし今や私たちは、つくった音を様々な方法で残すことができます。少々話が飛びますが、最近の小学校の音楽授業を参観させて戴くと、1人1台の端末を操る子どもと先生との間には、「いま・ここ」の音も含めて、従来考えられなかったほどの大量の情報が瞬時に行き来します。ふと「この情報は何年後まで残るのだろうか」という考えが頭をよぎります。「いま・ここ」をそのまま残すことは出来ませんが、記録メディアに収めれば「いま・ここ」に近い音を後世まで残すこともできます。デジタルデータの寿命を調べてみると、長期保存用光ディスクならば理論上は千年保存できるそうです。教育現場で行き交うたくさんの「いま・ここ」の情報の中で、私たちは千年後まで何を残したいと思うのでしょうか。

今川恭子(聖心女子大学 教授)

Contents

- 3 | 巻頭インタビュー〈上〉
覚 和歌子 (作詞家・詩人)
- 8 | 授業者に訊く
田久景子 (江戸川区立西葛西中学校 指導教諭)
- 14 | 特集
こなっしーPresents
小学校デジタル教科書活用術 Vol.2
- 18 | レポート①
令和6年度 全日本音楽教育研究会全国大会(合同大会)
第66回 北海道音楽教育研究大会
旭川上川大会
- 22 | レポート②
花火の歌に思いをのせて
～弓削田健介さんと能登の子どもたちによる「いのちと夢のコンサート」
- 26 | Kyogei Presents
音楽診断
[第22回] 意外な一面をもった作曲家編(監修・解説:山田治生)
- 28 | Information
- 30 | 参考楽譜①
斉唱『ゆめはなび』(作詞・作曲:弓削田健介/協力:能登と長岡の児童生徒)
- 32 | 参考楽譜②
同声二部合唱『HANABI』(作詞・作曲:弓削田健介/協力:能登と長岡の児童生徒)
- 38 | エッセイ
新・音から広がる世界 [第17回] 藤原道山

巻頭インタビュー(上)

歌と詞

ことば

作詞家・詩人

覚和歌子

聞き手

三宅悠太

映画「千と千尋の神隠し」の主題歌『いつも何度でも』の作詞で知られる覚和歌子先生は、シンガーソングライターとして自らライブや作曲を手掛けるなど、音楽家としても幅広く活躍されています。歌に言葉をのせるとはどういうことか。教科書掲載曲『ペガサス』『タイムリーパー』でタッグを組んだ作曲家の三宅悠太先生を聞き手に、「言葉をつむぐ」「歌詞を読む・歌う」をテーマにさまざまなお話を伺いました。

Wakako
Kaku



● 三宅悠太(みやけ・ゆうた)

東京藝術大学作曲科をアカンサス音楽賞および同声会賞を受賞して卒業後、同大学院修士課程作曲専攻修了。奏楽堂日本歌曲コンクール第12回作曲部門第1位。第79回日本音楽コンクール作曲部門(オーケストラ作品)第1位、併せて岩谷賞(聴衆賞)および明治安田賞受賞。管弦楽、室内楽、舞台音楽、合唱曲、ほか多岐に渡る作編曲を手がけ、これまでに数多くのソリストや演奏団体、学校、出版社等からの委嘱により作品を作曲。Nコン2016高等学校の部課題曲『次元』作曲者。作編曲活動の傍ら、全国各地より招聘され講習会講師や講演、各種コンクール審査員、客演指揮などを務めている。聖心女子大学、エリザベト音楽大学、都立総合芸術高等学校 各講師。

合唱曲『ペガサス』ができるまで

三宅: 2021年の暮れ頃に「下級生が憧れるような小学校高学年向けの合唱曲を書いてほしい」と教育芸術社の編集部からお電話をいただきました。ポップスの世界だと普通にあると思うのですが、私が合唱作曲において曲を先につくるということはそんなに多くないですよ。作詞について希望を尋ねられた際、真っ先に「覚さんとこのお仕事ができたらうれしいです」とお話ししました。

覚: 作曲期間はどのくらいあったんですか？

三宅: 数週間くらいだったと思います。12月にご依頼をいただいて完成したのが年末頃だったので。それから、iPhoneで撮影したピアノ演奏動画を覚さんにお送りし作詞

「開いたページに」の「ひ」だけでも
世界がもう生まれるというか。
言葉の音は詩が歌になるときの
重要な要素だと感じます。

をしていただいて、という流れだったかと思います。このように曲先であとから言葉を書くときと、先に言葉から書くとき(詞先)とで、覚さんの中で何か違うことや、そのときのスイッチの入り方などがあれば教えてください。

覚: 文芸の詩を書くとき、詞先の歌詞を書くとき、曲先の歌詞を書くとき、歌い手の誰かに向けてポップスを書くとき、自分が歌う歌詞を書くときとで、チャンネルが全部違いますね。

三宅: 興味深いですね。はじめのチャンネル設定についてより詳しくお聞きしたいです。

覚: そうですね。まずは誰が歌うかから入ります。私は初期設定と呼んでいるんですけど。例えば、先ほどの話だと「下級生が憧れるような曲」と聞くと、歌っている子どもたちの顔が目につく。教科書に掲載される、4月の初め頃に歌う、そういう全ての設定条件を頭に入れて、そのあとそれを全部忘れて、あとは言葉がやってくるに任せるという感じです。

曲先の場合は私が歌う人間だからかな、メロディーに引張られて言葉が出てくる、聴いたときに言葉がすでにのって聞こえてくるみたいなことはあります。

三宅: 私がお送りした音源を聴かれて、何か部分的なフレーズから言葉が出てきたというようなことはありましたか？

覚: 『ペガサス』の場合は歌い出しでしたね。学年が上がると教室が変わるでしょう。階が2階とか3階に上がって空に近くなる。新しい教室に入ったそのタイミング、教室と教室の窓から見える景色が馴染んでいく時期に歌う歌だなと思ったときに、3階の「窓」から遮るものがない、いい「青空」が見えたんです。

三宅: タイトルの「ペガサス」という言葉もセットでやってきた感じでしょうか？

覚: 校歌や小学生向けの歌には「鳥」と「空」が歌われることがほんとうに多いですよ。ありきたりな単語じゃなくて、何か別の鮮やかなイメージの、はばたくものをもったときに「ペガサス」が現れました。ペガサスは「稲妻」を司りますが、稲妻はアイデアの「ひらめき」の比喩でもあります。

生きることって、アイデアを出しながら日々を構築していくってことでしょ、それなら今回のイメージにぴったりじゃないか。そんなふうに決まっていきました。

作り手の限らない喜びは “ひらめき”にある

三宅：教科書の『ペガサス』の前ページに載っている曲が『つばさをください』で、「飛んで行く」とか「翼」とか、一連のドラマを子どもたちが共感して歌ってくれているという声を聞いて、とてもうれしく感じました。ところで、『ペガサス』の作曲をご依頼いただいた際の尺設定は「16小節の旋律」で、作曲の仕事の中でも特に短いものでした。高学年が歌うということで、曲の中にある程度のドラマや起承転結を内包できるように書きたいという思いがあったのですが、今回のように曲が先にできているとき、詩の構成は曲に影響を受けて展開、シンクロさせていくものですか？

覚：歌詞の構成もメロディーの構成に引っ張られて自然に成立していきますね。考えて構成していくとすれば、曲中の肝になる言葉に全体を収れんさせる感じかな。メロディーからイメージできる言葉をとにかく紙に書き出して、それを取捨選択して組み立てていく。ちょっとしたパズル感覚もあるんですが、メロディーと流れにピッタリはまったときの「来た！」という快感を積み上げていく。“虫食い”状態を少しずつ埋めていったり、前後の行を入れ替えたりとか、遠目で俯瞰したり近目で接写したり時間の許す限りあれこれやっていますね。

三宅：ありがとうございます。今いろんなことが1本につながってきました。

覚：やっぱりメロディーには見えてくる情景がある。メロディーがすでに世界をもっているというか。

三宅：それはお仕事をする中で、はじめの頃から感じていたことですか？

覚：そうですね。ポップスって私が仕事をはじめた80年代は似ているメロディーがとても多くて、そこから

見えてくる景色にあまり違いがなかった。でも、そういう仕事をたくさんしてきたことで、小さな違いでイメージを呼び込む鍛錬ができたかもしれないです。

三宅：作曲はよく天から音が降ってくるものと思われる節があるのですが、実際は論文を書くみたいな、そういう地味な仕事だと思っています。起点となる衝動や源泉は、不思議なインスピレーションだったりしますけど。

覚：でも、最終的にはひらめきが全てじゃありませんか？作り手の限らない喜びはそこにあるっていう気がしません？あとから自分の作品を味わって「これほんとうに自分で書いたのかな」って思う瞬間があるでしょう。何度聴いても新鮮っていうようなものが生まれたとき、何か大きなものつつなが

作品には小さな光を宿したい、
 宿っていてほしいと
 思いながら創作しています。



● 覚 和歌子(かく・わかこ)

山梨県出身、千葉県育ち。早大卒業と同時に前衛ロックバンドショコラータで作詞家デビュー。ムーンライダーズ、平原綾香、SMAP、夏川りみ、クミコ、沢田研二などに多く作品を提供するほか、Nコン課題曲、合唱曲、校歌、市民歌、音楽教科書の書下し曲なども手掛ける。'01年映画「千と千尋の神隠し」主題歌『いつも何度でも』作詞でレコード大賞受賞。自らもシンガーソングライターとしてライブを展開。自唱CD 4枚の他、詩集『ゼロになるからだ』(徳間書店)、『覚和歌子詩集』(角川春樹事務所)など著作多数。映画監督、脚本、舞台演出、朗読、翻訳、絵本創作、米国大学における日本語講師など、詩作を軸足に活動は多岐。最新刊に『かっぱ語録』(谷川俊太郎氏と共著/角川春樹事務所)。



取材は2024年11月15日、自由が丘で行われた

れた、あれに勝る快感ってないんですよね。それがあからこそ創作し続けていける。結局は頭で考えたものじゃなくて、源泉が不明のどこかからふともたらされたものが最高峰っていう気はします。

三宅：声にならないくらい共感しています。

覚：ね、これがこの仕事の幸せですよ。

三宅：『ペガサス』の1番のサビの歌詞「夢の所在地は 約束の地図の上」⁽¹⁾、これを読んだ瞬間に私は覚さんを感じました。

覚：私らしいと自分でも思います。ふふふ。

三宅：このあたりのキーワードに対しては、何か思いやイメージがありますか？

覚：少しマニアックな話になるんですけど、私はスピリチュアリストを自認しています。いのちは生まれて、営まれて、そして死んでいく。でもその前と後の世界もあるし、転生もあるんだろうなと思っています。いのちのエネルギーは途切れない。そう考えるとものすごく自分の中でじっくりくるんです。よく「魂は一生のスケジュールを決めて生まれてくる」といわれますけど、歌詞の「約束の地図」は、その魂が決めてきたスケジュールのことなんですよ。

自分の身体が反応するようなフレーズ

三宅：言葉を書く仕事をされる際、特に大切にされている

ことや、こだわっていらっしゃることはありますか？

覚：作品には小さな光を宿したい、宿っていてほしいと思いつながりながら創作しています。私たちみんなはこの時代を、それと気付いたり気付かなかつたりしながらギリギリに生きていると思う。一人一人の意識下の魂レベルのところに作品が生きる力として働きかけられたらいいなと思います。あともう1日、光を信じて生きてみようと思ってもらえるような。まあ技術的なことを言うと、決まり文句はできるだけ使わないようにしています。受け手の感性をキックすることを意識して書いていますね。頭で考えて何とかしようと思っても絶対にはまくはいかない。自分の身体にフィードバックして、反応を起こすようなフレーズを探していますね。

三宅：小手先の技術ではないわけですね。

覚：理屈じゃないというか。自分自身の血や肉を通して実感して確認するというか。でも実感しなければ詩が書けないというなら、全てのことを体験しなければならぬわけだからそれもちょっと違う。ただ私、人より共感覚が強いということはあると思います。共感覚とイメージーションを総動員して、こういう状況でこういうふうにいる人のメンタルには、こういう言葉を投げかけると響くだろう、みたいな。

三宅：それは、お仕事を続ける中で少しずつ身に付けられた感覚ですか？

覚：身体感覚にフィードバックするという習慣がついたのは、鬱病を患って以降なんです。31歳で心身症みたいになった

あと、東洋系の身体エクササイズに出会い右脳優位になったら、そういうつくり方に自然と変わっていきました。同時に共感覚も強くなっていったような気がします。何しろ涙もろくなったから(笑)。一連の経験は私にとって必要なものだったんだろうと今は思います。

音楽性 = 身体性

三宅：歌、合唱における言葉との向き合い方についてお聞きします。ご自身が書かれた言葉が音楽になった際、イメージしていた世界と違うものが生まれてしまったということもあるのではないかと思います。

覚：こんな曲が付いちゃったか、あら残念って思うことはないんですよ。いつもうれしい驚きで受け止めています。『タイムリーパー』は合唱曲が前提ながら、いわゆる普通のクラス合唱曲にはならないだろうと思って作詞していたので、三宅さんの曲を聴いて、いい意味で「やっぱりこういうイメージを共有していたよね」と感じました。

三宅：「開いたページに 光が動く まばたきしたら 視界がはじけた」⁽²⁾ 歌詞の1行目に感じた世界のうごめきやエネルギーが、作曲における最初のインスピレーションでした。よくあるクラス合唱曲の4ビートの感じじゃなく、「はじめから緊張感に満ちている」という感覚は覚さんの言葉から受けた印象だったので、そういうイメージで歌詞が書かれていたと聞いてとてもうれしいです。

覚：子どもたちの、ノって歌ってくれる様子を想像していました。

三宅：先ほど創作の際にチャンネルがいくつかあるというお話を伺いましたが、歌詞として言葉を書くときのスイッチの入り方についても伺えますか？

覚：やっぱり歌は有節を意識するとスイッチが入りやすいですね。それと、歌うことを前提にしていない文芸の詩と違って、歌詞はできるだけ漢字の熟語を使わないで和語にひらきます。ひらがなは音(表音文字)なので、言葉の意味を考える前にまず音が身体感覚に届く。つまり身体と親和性が高い。そして音自体にもすでに意味がある。「あ」だったら宇宙が開いていく感じとか、「か」だったら火が燃える感じとか。そういうものを全部取り込んだときにもうスイッチは入っていて、ゾーンに入っている。

三宅：特に日本語は、言葉1文字の音自体がもつ力が大きいなと思います。片や5個しか母音がないと言われがちですがそのニュアンスも多彩ですし、子音と統合されると例えば、きらめきの「き」だってすごいエネルギーをもっている。

覚：ほんとうにキラキラしているまぶしくて強い音ですよ。

三宅：「開いたページに」の「ひ」だけでも世界がもう生まれるというか。言葉の音は詩が歌になるときの重要な要素だと感じます。そして作曲時はもとより、歌うときにはそれが具現化され体感されるわけですね。

覚：音楽性って身体性のことですよ。身体が音の響きに反応して楽曲の世界が見えてくる。漢語の二文字熟語は同音異義語が多いから、よっぽどその熟語感の硬さが効果的であるという場合以外はひらがなにひらきます。それから、色の名前を例にとるとよく分かるように、日本語はボキャブラリーが英語の10倍とも言われています。「かなしみ」という1つの感情の中にも細かい目盛りのグラデーションを表現できる。単語の絶対数も音も意味も豊かだから、日本語で歌詞をつくるというのはとても繊細な作業で、そこがまた楽しい。

三宅：作詞をされる時点で、この言葉はこういうふう演奏してほしい、またこの言葉にはこんなメロディーのイメージがあって、というようなことはありますか？

覚：ときどきあります。詩先で書きながら何だか3拍子が出てくるなとか。一応作曲家さんには伝えますが、反映してくださる方もいるし、そうでない方もいてそれぞれです。ただ、メロディーが聴こえながら書いた詞は、楽曲になってもいい感じになる場合が多いですね。

三宅：独特のリズムの波長みたいなものがその中に出てくるような感じですか？

覚：歌うための言葉が出てきているなという感じかな。あとは自分が歌い手であるということもあると思いますが、歌入れされたデータを聴いて、「このニュアンスじゃないんだよな」と感じることも結構あります。でも楽曲は歌い手さんとの付き合いの中で育っていくものだから、今そういうふうに解釈されたんだったら尊重するというスタンスです。

つづく





ウクレレ合奏の様子

Ask the teacher

授業者に 訊く

江戸川区立
西葛西中学校



滝口亮介先生(聞き手)と田久景子先生(授業者)

今回の「授業者に訊く」でご紹介するのは、江戸川区立西葛西中学校2年生のウクレレを用いた器楽の授業です。生徒はカラフルなウクレレを1人1台手にし、本時の教材楽曲『家路』(ドボルザーク作曲)のコード伴奏と旋律奏の習得に励みます。対談では、ウクレレの魅力と音楽科における活用の可能性をさまざまな角度からお伺いしました。

授業者: 田久景子(江戸川区立西葛西中学校 指導教諭)

聞き手: 滝口亮介(洗足学園音楽大学 名誉教授)

本時の授業の位置付け

題 材:「ウクレレでアンサンブルをしよう」

教 材:『家路』(ドボルザーク作曲)

※交響曲第9番「新世界より」第2楽章冒頭部分

ねらい:『家路』の演奏を通してウクレレの特徴を理解し、曲にふさわしい表現を創意工夫しながら、旋律と伴奏を他者と合わせて演奏する。

指導事項との関連: A 表現 (2) 器楽 ア、イ(イ)、ウ(ア)〔共通事項〕(1)ア

本題材において生徒の思考・判断のよりどころとなる

主な音楽を形づくっている要素:「音色」、「リズム」、「テクスチャ」

授業の流れ

学習の内容・学習活動	
導入	<ul style="list-style-type: none"> ○ウクレレの奏法について、これまでの学習を振り返る。 <ul style="list-style-type: none"> ・ウクレレの各部の名称を確かめ、チューニングを行う。 ・前時までに学習したHoneyWorksの『可愛くてごめん』を合奏する。 ○『家路』のアンサンブルに見通しをもつ。 <ul style="list-style-type: none"> ・旋律と伴奏を合わせて演奏することを知り、模範演奏を視聴して、曲の雰囲気や特徴を捉える。
展開	<ul style="list-style-type: none"> ○『家路』の和音進行を確認し、伴奏の特徴を捉え演奏する。 <ul style="list-style-type: none"> ・4種類のコード(C、G、F、Am)の響きや左手の押さえ方を確認する。 ・姿勢や構え方、ストローク奏法など、ウクレレを演奏するために必要な基礎となる奏法について、ペアで確認しながら演奏する。 ○ウクレレによるハ長調の音階「ドレミファソラシド」のポジションを知る。 <ul style="list-style-type: none"> ・人さし指、中指、薬指の指番号をもとに、各音のポジションを確かめながら音を出す。 ○『家路』の旋律を確認し、演奏する。 <ul style="list-style-type: none"> ・左手の指板の押さえ方や右手の弦の弾き方などについて、ペアで助言し合う。 ・他者からの助言を参考にして、自分がよくなったと思う点や改善点を見出す。
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ○本時のまとめをする。 <ul style="list-style-type: none"> ・本時の授業でできるようになったことを確認し、第3時までの学習に見通しをもつ。 ・次時は旋律と伴奏を合わせて演奏することを覚える。

ウクレレを活用した楽しい授業づくり

生徒の表情を見取る工夫

滝口：本日はありがとうございました。礼儀正しく一生懸命授業に取り組む生徒の姿を見て、学級全体の質の高さを感じました。音楽科学習に取り組むルールなどを、1年生の頃からしっかりとご指導されてきたことが分かりますね。

田久：音楽の授業は準備や片付け、歌う際の並び方といったさまざまな行動の上に成り立ちますので、4月の段階ではそういった規律をきちんと整えるところから指導します。ですから、生徒たちにとって年度始めの私は怖い先生だったかもしれません(笑)。

滝口：授業の導入で校歌を歌っていましたが、教室のあちこちに掲示してあるモーツァルトやベートーヴェンなどの肖像画を見て歌うよう指導されていましたね。これは授業開始のルーティン活動なのですか？

田久：はい。教室内の掲示を見ながら歌わせることで、生徒の目線を上げると同時に声を遠くへ飛ばす意識付けとなり、歌唱中の表情をチェックすることもできます。

滝口：生徒の歌い方を観察する手段の一つとしては非常に有効ですね。

田久：本時は2年生でしたが、例えば1年生は『喜びの歌』をピアノで弾いて「つくった人のほうを見て歌おう」と指示し、作曲家の肖像画を探させるなど、ゲーム感覚で授業の導入を楽しんでいます。

コロナ禍を境に導入されたウクレレ

滝口：田久先生がウクレレを授業に取り入れようとしたきっかけを教えてください。

田久：きっかけはコロナ禍でした。歌

が歌えない、リコーダーも吹けない、じゃあどうしようかと考えたときにウクレレと出会い、当時の赴任先の校長に相談し導入を許可していただいたことがきっかけです。授業での導入事例は聞いたことがなかったのですが、教材としてのウクレレの魅力を伝えたところ認めていただき、とても感謝しています。

滝口：現在授業でお使いのウクレレはいくらぐらいのものですか？

田久：1つ2,000円くらいです。より高価なものになると音色も豊かになっていきます。

滝口：意外に安価ですね。おそらく授業中に楽器を落とす生徒もいるでしょうから、そのくらいの値段のものがちょうどよいのではと思います(笑)。本時は器楽領域を主とした内容でしたが、ふだんの授業の中でウクレレに関する民族楽器的な要素をどのように指導されていますか？

田久：ウクレレ、薩摩琵琶、シタール、バラライカ、それぞれの楽器の代表曲を取り上げ、音色の違いを聴き比べる鑑賞の授業などを行っています。その際、ウクレレは『カイマナヒラ』を鑑

賞教材としました。

滝口：ハワイアンの名曲ですね。器楽の授業で実際に演奏することもありますか？

田久：実はまだ器楽の練習曲としてハワイのスタンダードな曲を扱ったことがなく、最近も現代の中学生が好きそうなHoneyWorksの『可愛くてごめん』を教材の一つとしました。ただ、本日生徒に配布した『家路』のプリントの裏面に『カイマナヒラ』を印刷しており、いずれこの曲も授業でやっていこうかなと考えています。授業でウクレレを扱ううえで、ハワイアンの定番曲に触れさせるというのもやはり大切なことです。江戸川区は、令和4年からハワイのホノルル市と姉妹都市として交流していることもあり、ハワイアンの曲を積極的に取り入れていきたいです。

滝口：ドボルザークの『家路』を本時の教材に選ばれた理由はなんですか？

田久：今まで流行りの曲をたくさん演奏してきたので、クラシックの名曲も取り入れてみようかと考えてのことです。

滝口：授業で後ろの席の男子生徒が『可愛くてごめん』をととても速いテンポで、しかも素早いコードチェンジで見事に



授業の始まりに歌唱する様子

弾いていました。意欲的な生徒に対して、個別に具体的な支援をすることはありますか？

田久：例えば、『可愛くてごめん』は原曲コードのままだと演奏がたいへん難しいので、授業ではあえてみんなが弾きやすいコード進行となるよう、押さえるのが難しいコードを既習のコードに置き換えるなど手を加えています。技能の習得が進んでいる生徒に対しては、その曲を原曲のコード進行で弾いてみるよう挑戦させたり、苦手な生徒に対して先生役となるよう声を掛けたりしています。

少ないコードでも 得られる達成感

滝口：生徒は1年次からウクレレに親しんでいるとのことでしたが、初回の授業はどういった内容から始められたのでしょうか？



1人1台ウクレレを手にし、各自チューナーを用いて調弦を行う

田久：まず楽器を構えて、何でもいから音を鳴らさせるところからです。その次にチューニングを教えます。自分の顔に近い弦からソ(G)、ド(C)、ミ(E)、ラ(A)となります。当初は生徒個々の音感を頼りにやらせていたのですが、今では1人1個チューナーを渡してチューニングをさせるようにしています。曲の練習は、Cのコードだけで弾くことのできる『かえるのうた』の弾き語りから始めました。

滝口：そこから徐々に使うコードを増やしていくということですね。

田久：『かえるのうた』の次は『Happy Birthday to You』です。FのコードはCに続いて簡単に弾くことができます。その次のG₇が第1の壁なのですが、手首を外側にひねると弦が押さえやすくなるので、そのように指導することで生徒もできるようになります。使うコードが2つの曲もあるのですが、G₇をマスターすることで、コードが3つの曲を演奏できるようになります。瑛人の『香水』はF-G₇-Cの3つのコードをくり返すことで、最初から最後まで曲の雰囲気そのままに弾くことができます。Amをマスターするとさらにいろいろな曲ができるようになるので、流行りの曲などをどんどん授業で取り入れ、弾き語りに取り組んでいきます。とにかく、「ウクレレを弾くことが楽しい」と感じさせるのが

大切だと考えています。

滝口：選曲のポイントはありますか？

田久：使われているコードが少ない曲を選ぶことです。コードが多い場合は、少ないコードで曲が成り立つよう編曲する技術も必要なのですが、コード4つくらいまでだったら中学1年生でもすぐに弾けるようになると思います。

滝口：旋律の学習から入るリコーダーなどと、和声(コード)の学習から入るウクレレとでは、指導のアプローチが変わってきますね。先生がご指導される中で、ウクレレを通して指導がしやすくなった、指導の幅が広がったと感じることはありますか？

田久：この授業は、思春期・反抗期の生徒も嫌がらずに取り組んでくれるんです。特に男子生徒はギターのように構える楽器をやりたいがるので、生徒の発達段階にマッチした楽器だなと感じています。弾き語りができることで、生徒はより音楽をやっているという達成感を得ているのではないかと思います。

指導・評価と 各領域への関わり

滝口：ウクレレの授業評価はどのように行っていますか？

田久：例えば、『家路』の旋律の1段目(4小節)が弾けるようになったら、前に来て個別に弾かせるなどして技能



○ 滝口亮介(たきぐち・りょうすけ)
洗足学園音楽大学 名誉教授



前方のモニターで情報を補足しながら奏法を指導する田久先生



個人やペアによる練習を積みながら技術の習得を目指す

を評価しています。また、グループ活動における話し合いや口頭発表、演奏などを通して、思考、判断、表現を評価します。ウクレレは友達と距離を詰めて、演奏しながら話し合いができるというのも魅力の一つです。

滝口：ワークシートなどを活用されることはありますか？

田久：初めてウクレレと出会う題材では、楽器の構造や歴史など、ワークシートに沿って楽器の成り立ちを学習します。今日は題材の第1時だったため使いませんでした。授業の振り返りを書かせたり、生徒自身の習熟度や成果を見取ったりするために使用することもあります。

滝口：ウクレレの授業を従来の器楽教育に置き換えた際に、既存の指導要領の事項をどう具現化するか、またどうプラスアルファが存在するかについて教えてください。

田久：例えば、ギターはすでに教科書に載っていますよね。ギターとウクレレのコードや各部の名称はほとんど同じなので、そこを関連付けて指導できるメリットはあります。あとは、器楽の授業でウクレレの伴奏にリコーダーの旋律を重ねたり、鑑賞の授業で撥弦楽器の音色の比較として三味線とウクレレの音色を聴き比べたりするなどして、従来の指導要領とつなげていくことができるかと思っています。

滝口：ウクレレにおける旋律と伴奏とのバランスは、どのように指導されますか？

田久：クラスを生活班6班に分けて、旋律担当と伴奏担当の人数を生徒に決めさせるなどして、個々の音量を考えさせています。合奏の際に旋律と伴奏の音色の区別が付きにくくなるため、その点をどのように解決していくかは今後の課題の一つですが、同じ音色どうしがブレンドされてウクレレ独特の心地よい響きを味わうことができるともいえます。

滝口：鑑賞・器楽領域とのつながりに加えて、年間指導計画の中でウクレレを創作の授業と関連付けることも想定されていますか？

田久：和音の指導に苦手意識をもたれている先生もいらっしゃると思うのですが、ウクレレを授業で扱うことで、生徒はある程度のコードを肌感覚で身に付けるようになります。例えば、幾つかのコードに合うよう旋律を付けさせるなど、ウクレレを通して養った和音感覚を生かした創作をやったらおもしろいのではないかと考えています。伴奏をしながら口ずさむ、自分で考えた旋律を歌うくらいだったら彼らはすぐにできると思いますので、そういった授業を2年生で計画中です。また、歌唱においてもハワイアン^{はっぴん}の発声法を取り入れて「曲種に応じた発声」に触れるなど、ウクレレに関連付けた授業

を模索しています。

滝口：ウクレレがこれだけたくさんの領域に波及できるというのは素晴らしいですね。

ウクレレを通して 音楽の魅力を生徒に伝える

滝口：本日の授業を拝見して、とても丁寧な教え方をされているという印象を受けました。本時は全3時間中の第1時ということですが、最終的には本題材で生徒にどのような学力を身に付



○田久景子(たきゅう・けいこ)
江戸川区立西葛西中学校 指導教諭



『家路』のコード伴奏に続き、初めて旋律を練習する生徒たち



2024年10月に行われた学芸発表会の様子

けさせることを想定していますか？

田久：授業の中でも何点かキーワードを示したのですが、曲に合うような伴奏のリズムを考えさせるとか、旋律と伴奏を合わせることで音量バランスに気付かせるなど“考えながら音楽をする”こと、“自分1人ではなく周りに合わせる”ことなどを身に付けさせていきたいと考えています。

滝口：次時では伴奏のリズムを考えさせると仰っていましたが、どのような展望が見込めそうでしょうか？

田久：弾き語りをする際、生徒は4拍子の曲に対して4分音符4つのリズムを使うことが多かったので、これまでの授業内容を踏まえながら、付点や長い音価を使ったリズムの変化を見せてくれたらいいなと思っています。

滝口：授業中、半ば技術の習得を諦めかけているような生徒も見られましたが、彼は楽器を弾く手を止めずに最後までウクレレ合奏の輪の中に溶け込もうとしていました。簡単に音が出て他者の音色と混ざることができるウクレレの利点が生かされていた例ではないかと思います。

田久：苦手な生徒を取りこぼさないというのも大事なことだと思っています。ギターは弦が6本かつ指板が大きいので、過去の授業では手の小さな女子生徒が苦勞していました。そういった点からも、弦楽器の入り口としてウクレレは適していると感じています。Cや

Fのコードであれば簡単に弾くことができるので、生徒の自信にもつながります。また、ギターのように構える楽器に憧れをもつ生徒もたくさんいて、中には「先生、ウクレレ買っちゃいました」と言いに来る生徒もいます。卒業したあとに音楽活動を続けている生徒もおり、この授業をきっかけに音楽へ興味をもってくれる生徒がいることをとてもうれしく感じています。この授業を発展させて、ギターの学習へとつなげていくことも考えていきたいです。

滝口：授業の延長として、今後発展的に発表する機会などもあるのでしょうか？

田久：先月、校内で学芸発表会がありました。そこでは歌唱とウクレレ、簡単な小物打楽器のパートに分かれて『可愛くてごめん』などを演奏し、会場を盛り上げることができました。

滝口：全員参加で音楽に取り組める場は貴重ですね。最後に、授業における

ウクレレ導入の総合的な価値をどのように感じてもらえるか教えてください。

田久：学習指導要領においては、音楽科の目標として「生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力」の育成を目指すことが示されています。生徒たちの声として、「結構簡単に弾けてわくわくした気持ちになった」「ウクレレをきっかけに三味線やギターに興味をもった」などの声が聞かれます。生徒の音楽経験の幅が広がったり、横のつながりが育まれたり、演奏を通して生徒が音楽学習に前向きになり笑顔が増えたりと、さまざまな効果を感じています。実践例が少ないからこそ、今後さらなる授業改善に努めていきたいです。教材として大きな可能性を秘めたウクレレについて今後も研究を続け、さまざまな音楽体験を通して、生徒の豊かな情操を培っていかれたらと思います。

校長先生より

教師が楽しく授業できなければ、生徒には何も伝わりません。教師が楽しく授業するから、生徒も学ぼうと思えるのです。生徒の姿を見れば学校の様子はすぐに分かります。暗い顔をして登校する生徒を減らしたい。明るく楽しい顔で家に帰ってほしい。そのためにも、教師一人一人が粹組みにとらわれず、いかに自分のやりたいことをきちんとやり、自分を出せる環境が作れるかを大切に考えていきたいと思っています。



川崎純一先生
江戸川区立
西葛西中学校 校長

「カトカトーン通信」のご案内

音楽Webアプリケーション「カトカトーン」の活用例やオススメ情報をお届けする「カトカトーン通信」の最新版とバックナンバーを教育芸術社Webサイトで公開中！

vol. 4～6では「高校生の音楽1」「MOUSA 2」より創作教材、「小学生の音楽5」より音楽づくりの展開例をご紹介します。詳しくは、以下の二次元コードまたはURLをご参照ください！

<https://www.kyogei.co.jp/katokatone/info/>



カトカトーン通信 vol.4

「高校生の音楽1」(令和4年度用～)

p.122 《きらきら星》の旋律で音楽をつくろう

あらかじめ入力された旋律を変化させて変奏曲を創作する変奏編と、「旋律」「和音」「低音」の3つのパートからなる器楽アンサンブルに編曲する編曲編を掲載しています。



カトカトーン通信 vol.5

「MOUSA 2」(令和5年度用～)

p.58 構成を工夫して作品をつくろう

楽器の音色の特徴を生かして2小節の主題をつくり、それを変化させて構成を工夫しながら、2つのパートによる作品をつくります。



カトカトーン通信 vol.6

「小学生の音楽5」(令和6年度用～)

p.38 「静かにねむれ」の和音で旋律づくり

ハ長調の和音の構成音を使って、和音のひびきの移り変わりを感じ取りながら自分の思いや意図に合った旋律をつくります。巻末には授業で活用できるカトカトーンのミニドリルを掲載しています。

新たな音楽Webアプリケーション
カトカトーン

<https://www.kyogei.co.jp/katokatone/>



小学校デジタル教科書活用術 Vol.2

この連載では、教育芸術社の小学校教科書指導書(令和6年度～)フルセットに含まれる「指導者用デジタル教科書(教材)」の授業に役立つ活用方法をご紹介します。歌唱と器楽を取り上げたVol.1に続き、Vol.2では、【音楽づくり編】と【鑑賞編】をお届けします。今号も弊社小学校教科書著作者の一人である小梨貴弘先生に、即実践に対応できる活用のポイントを伺いました。



イラストレーション:橋本金夢

音楽づくり編

ポイント ▶ 紙面の中に授業に必要なものがそろっている

小学生の音楽4「言葉でリズムアンサンブル」(P.24)



教科書紙面にある二次元コードから、「ムーブの部屋」(二次元コードコンテンツ)にアクセスすることができます。「指導者用デジタル教科書(教材)」のコンテンツと同じものが操作できるので、1人1台端末で開けば、すぐに子どもたちも音楽づくりの活動を進めることができます。

操作



発展的な活動の例



※変えた言葉は再生されません。拍の音のみ再生されます。

この **操作アイコン** には、授業にそのまま使えるコンテンツがそろっています。画面上部にある㉗～㉙のリズムや「くり返し」などの要素をドラッグして動かすだけで譜例が完成します。作った音楽は画面下の再生ボタンから聴くことができるため、クラス全体へ共有するのにも役立ちます。また、「指導者用デジタル教科書(教材)」では、画面右上のシートタブを切り替えることで、複数の記録を残すことが可能です(「ムーブの部屋」にはありません)。さらにこの教材では、㉗～㉙のリズムの言葉を自由に変えて発展的な活動をすることもできます。

紙のワークシートを作ったり黒板に掲示するリズムカードを作ったりと、これまで授業準備に取っていた時間が大幅に短縮!「ムーブの部屋」でも同様のコンテンツが使えて、入れたり消したりがスムーズに行えるため、子どもたちも音楽づくりの活動がしやすくなりました。





一部の教材には、音楽づくりの活動をどのように進めていくかを解説した動画や実践例の音源を試聴できる機能があります。動画は指導書の「音楽授業支援DVD」にも収録されていますが、「指導者用デジタル教科書(教材)」の紙面上でさっと開くことができるようになりました。私の場合、動画を使わずに自分で説明することもあります。私ばかり話して子どもの集中力が途切れないように、あえて解説や例示をこの **動画再生アイコン・音声アイコン** に任せて、子どもの気分転換や注目を促すという使い方をしています。



ここが大事!

音楽づくりでデジタルコンテンツを効果的に活用するために

① 使用する目的や意図を明確にする

そのコンテンツが学習目標を達成するための有効的な活用手段であるかを吟味することが大切です。子どもの創造性を生かしつつも、その題材の目標に到達できるようにするには、どのコンテンツを使うとよいかを考えていきたいですね。

③ 互いの作品を共有し、対話的な学びが生まれる時間を設ける

どうしても1人の活動になりやすいので、どんな意図でつくったのか、どう感じたのかを子どもどうしが言葉で交流する時間を必ずつくるようにしています。「ムーブの部屋」では、画面上のドレミをタップしたり、カードを動かしたりするだけで簡単に音楽づくりの活動が行え、つくった音楽をすぐに再生して聴くこともできるので、互いに見せ合って隣どうして音を重ねてみたり、グループになってつなげてみたりという対話的な学びがとてもしやすくなりました。そうしたデジタルの強みを生かして、学びを膨らませていけるとよいですね。

② 操作に慣れる「ティンカリング(いじくり)」を十分に行う

「ムーブの部屋」やWebアプリなどを使うときには、子どもがコンテンツに触れる時間をしっかり確保し、楽しい！ おもしろい！ から生まれる創作意欲を引き出すことが重要です。まずどんなことができるのかを十分に分かったうえで学習に使うと、広がりをもった授業展開へとつながっていきます。

④ 何らかの方法で作品を保存し、評価や学び合いの資料にする

学習者用デジタル教科書や「ムーブの部屋」には、つくった作品を保存する機能は付いていません。そのため、1人1台端末の機能を活用して画面録画、録音、スクリーンショット、コメントなど、教材に応じてさまざまな記録方法を検討するとよいでしょう。例えば、私は子どもに、自分がつくった音楽の画面を全てスクリーンショットさせ、Google Classroomなどの学習支援ソフトウェアを使って、つくった意図を説明させるようにしています。こうした機能で補助しながら、評価や学びに生かせるようにしていく必要があります。

ポイント

授業に役立つ音源や映像資料が盛りだくさん

鑑賞音源

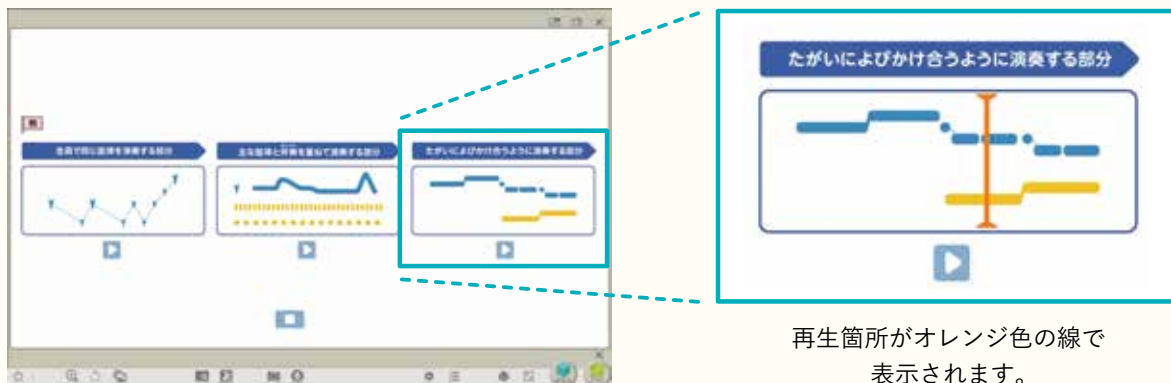


鑑賞教材の曲名の横に **鑑賞音源アイコン** が付いている楽曲は、「指導者用デジタル教科書(教材)」の紙面の中で曲全体を聴くことができます。鑑賞用CDにも収録されていますが、教科書紙面を提示しながらボタン一つで再生することができるので、効率的に授業を進められます。

音声



小学生の音楽5「アイネ クライネ ナハトムジーク 第1楽章」(P.20)



再生箇所がオレンジ色の線で表示されます。

この教材では、**音声アイコン** から教科書に載っている各部分を抜き出した音源を聴くことができます。それぞれの音源を再生すると、上の図のように音と図形がリンクして再生されるので、目で追って音楽を確認することができます。「指導者用デジタル教科書(教材)」のほか、「ムーブの部屋」から聴くこともできるので、子どもが1人1台端末を自由に操作しながら聴き取る活動に最適です。

動画



小学生の音楽5「【楽器図鑑】弦楽器の仲間を知ろう」(P.22)



こういった各楽器の音色を聴き比べる活動では、すぐに動画が見られると便利です。「指導者用デジタル教科書(教材)」の紙面上に映像資料がそろっているため、操作が比較的スムーズで、動画の音を何度も聴き比べながら音の高さの違いを感じ取る活動がやりやすくなると思います。また、音楽室ではなくホームルームの教室を使っている学校も多いと思いますが、教室のモニターなどに映せば、オーディオプレイヤーなどの機材がなくても活動ができるのでよいですね。

小学生の音楽4「ことをひいてみよう」(P.60)



箏の実演を伴うこの教材では、学生時代に箏に触れたことがなく、教えるのが難しいと感じる先生も多いと思います。そのような先生でも、「指導者用デジタル教科書(教材)」があれば動画を開くだけで基礎を解説してくれますし、先生も子どもと一緒に学びながら授業を進めることができます。

こなっしー(小梨先生)は、こう使う【応用編】

小学生の音楽5「アイネ クライネ ナハトムジーク 第1楽章」(P.20)

① 曲全体を聴く前に

この教材では、私は最初に曲名を言います。「この曲名からどんな音楽か思い浮かぶ人いる？」と聞くと誰も手が挙がらないんです。ところが冒頭部分のみを流してみると、多くの子どもが知っているのと反応します。「じゃ、どこで聴いたことあるかな？」というところから始めて、「実は、モーツァルトさんが作曲したんだよ」と伝え、子どもの興味がぐっと寄ったところで曲全体を聴いてもらいます。

② 曲全体とパートごとの演奏を聴く

曲全体の演奏は「指導者用デジタル教科書(教材)」の中の音源を使用したり、演奏している動画を探して見せたりしています。子どもが曲に少し慣れてきたら、パートごとの演奏を聴きます。私はこのとき、パートごとに演奏しているYouTubeなどの映像を紹介します。例えば、全員がずっと同じ旋律を弾いているのかと思ったら、チェロは他の楽器とは違う動きをしているとか、視覚的にも気付くことができるのでおすすめです。

③ 音の重なりを理解する

パートごとの演奏も分かってきたら、教科書に載っている音の図形に注目します。前ページで紹介した **音声アイコン** からそれぞれの部分を聴きながら、図形を確認していきます。さらに発展させる場合は、音源に合わせて楽譜がスクロールされる動画なども別途活用します。さっき図形で見たものが楽譜ではどのように表されているかということを考えることもできます。このように音源や映像の組み合わせによって、演奏の動きと図形、そして楽譜それぞれとの関連性が少しずつ見えてきて、音の重なりを理解することにつながっていきます。また、1つ前の教材『いつでもあの海は』で学習した、2つの旋律の重なり方の違いを確認する活動と結び付けて子どもに考えさせることで、題材の目標に近づくことができます。

鑑賞の場合は、発展的な動画やツールなどいろいろなものを合わせ接で、学習効果がより高まりますよ。



小梨先生からのメッセージ

GIGAスクール構想が始まって以来、全国各地で先生方のさまざまな実践が行われてきましたが、今年度の「指導者用デジタル教科書(教材)」や二次元コードコンテンツの充実によって、それまかなり成熟してきたなという感じがします。音楽科の授業におけるデジタル教材の活用ということで、その領域、内容、場面によって学習効果が変わり、使い方もさまざまあるということが見えてきたところです。

そのような中で、今回の「指導者用デジタル教科書(教材)」ですが、私がこれをいちばん使ってもらいたいのは、学級担任の先生です。これまで音楽科の授業では、まず先生が伴奏を弾かなくてははいけないということで、音楽が得意ではない先生も簡易伴奏だけでも弾けるようにと、時間のない中でピアノやオルガンを必死に練習してきました。練習も大事ですが、そればかりでは子どもたちによりよい授業を届けることになりません。音源やデジタル教材に任せられる部分は活用して、その代わりに、子どもに寄り添って一緒に元よく歌ったり、子どもの観察をしたりしながら授業を進めていったほうがよりよい学習展開を望めます。授業でただ歌ったり聴いたりして終わりになってしまわないようにするためにも、ぜひ活用できるポイントを探してみてください。やはり機能を使いこなすことが非常に重要になります。そのために、各学校にいる音楽専科の先生や主任の先生が使い方の講習会を開くなどして、学校の中でデジタル教科書をより広めていただくと、音楽の教え方、学び方が大いに変わってくると思います。



令和6年度 全日本音楽教育研究会 全国大会（合同大会）

第66回 北海道音楽教育研究大会

旭川上川大会

音とつながる 心がつながる 学びがつながる



出演者合同合唱『あなたがどこかで』

令和6年10月10日・11日、全日本音楽教育研究会全国大会（合同大会）、第66回北海道音楽教育研究大会旭川上川大会が、旭川市の旭川志峯幼稚園、つくし幼稚園、旭川天使幼稚園、旭川市立神楽小学校、旭川市大雪クリスタルホール、木楽輪（きらりん）、旭川地場産業振興センター、旭川市民文化会館で開催されました。大会の2日間を、小学校部会と中学校部会の発表を中心にレポートします。

旭川市で全国大会開催

爽やかな秋風を感じる晴天の下、全日本音楽教育研究会全国大会が開催されました。開催地の旭川市は、北海道のほぼ中央に位置します。石狩川をはじめとする多くの河川の合流部にあり、雄大な大雪山連峰を臨む豊かな自然を有しつつ、道北の経済・産業・文化の中心都市としても発展している、札幌市に次ぐ北海道第2位の人口を有する中核市です。古くからアイヌの人々の営みと開拓によって築かれた歴史あるこの地に、全国の音楽教育に携わる先生方が集まりました。

本大会の大会主題「音とつながる 心がつながる 学びがつながる」は、音楽科における一連の学習において、さまざまな「つながり」が学習や活動の支えになるという考えから設定されたものです。この大会主題を受け、各校の特色や授業実践の研究との関連を踏まえて、小学校部会主題「楽しもう音楽活動 味わおう音楽のよさ」、

中学校部会主題「広げよう音楽との関わり方 深めよう音楽への思いや音楽表現」が設定されました。

小学校部会（1日目）

10月10日午前、小学校部会は旭川市立神楽小学校、旭川市大雪クリスタルホールを会場に5つの授業実践が行われました。表現領域の器楽は、井口優芽先生（旭川市立西御料地小学校）、音楽づくりは、渡部紗季先生（旭川市立愛宕東小学校）、山本帆南先生（北海道教育大学附属旭川小学校）が担当しました。

鑑賞領域は、三村 仁先生（旭川市立神楽小学校）の「オーケストラのひびきに親しもう」です。ショスタコービチ作曲『祝典序曲』を教材に、オーケストラの楽器の音色やその変化に着目しながら鑑賞し、曲想の変化や音楽の構造との関わりについて、ICT端末を活用しながら考えを交えるなどして本時における「気づき」を確認しました。



三村 仁先生（旭川市立神楽小学校 第5学年）
鑑賞：オーケストラのひびきに親しもう



音の波形や実際の区切りと対比しながら
「変化」を感じた要因を考える



上野洋子先生(旭川市立千代田小学校 第4学年)
歌唱: 思いを音楽で表そう

なぜ曲想が「変化した」と感じたのかを考える場面では、児童がこれまでに学習した内容(演奏法や他の曲)を思い出しながら積極的に発言する様子が見られました。

表現領域の歌唱は、上野洋子先生(旭川市立千代田小学校)の「思いを音楽で表そう」です。『赤いやねの家』を教材に、歌詞の内容や曲想に合う表現を工夫することを授業のねらいとしています。2つのグループに分かれ、曲の伝えたい部分をどのように歌ったらよいか、児童は歌い試しながら考えを交えます。互いの共通点やよいところを整理しまとめ、工夫したことを意識しながら全体を通して歌い、授業を振り返りました。

録音した自分たちの歌声をタブレットで確認したり、児童の意見がすぐに共有できるよう授業支援ツールを用いたりするなど、両実践ともに積極的なICT端末の活用が印象的な授業でした。

中学校部会(1日目)

同日午前、中学校部会が旭川市大雪クリスタルホール、木楽輪で行われ、鑑賞領域は、平澤香織先生(北海道教育大学附属旭川中学校)、表現領域の器楽は、大地智之先生(剣淵町立剣淵中学校)が担当しました。

表現領域の歌唱は、木原晶子先生(旭川市立永山南中学校)の「ソーラン節の魅力味わおう」です。『ソーラン節』の歌唱表現を創意工夫することをねらいとして、図形楽譜の一節の表現(発声や発音、コブシの入れ方)の工夫について、グループ活動を通して個人の考えを共有し合います。各グループの発表においては、工夫した点を聴き合ったり、全員でまねして歌ったりと、学級全体で工夫の内容を確かめ合いながら郷土の伝統音楽に親しむ様子が印象的でした。

表現領域の創作は、熊澤直行先生(下川町立下川中学校)の「復役や変化を生かしてリズムパターンをつくろう」です。プルトン作曲『オーラ・リー』全体の曲想にふさわしいと思うリズムパターンをつくることをねらいと



曲想を生かした表現の工夫が伝わるよう
グループで何度も歌い試す



木原晶子先生(旭川市立永山南中学校 第1学年)
歌唱: ソーラン節の魅力味わおう



発表するグループと一緒に、学級全体で表現の工夫を確かめ合う



熊澤直行先生(下川町立下川中学校 第2学年)
創作: 反復や変化を生かしてリズムパターンをつくろう



個々の端末で音を確かめたり、
提出シートにそれぞれの工夫をまとめたりする

して、デジタルコンテンツ上で3つのリズムを組み合わせながら16小節のリズムパターンを創作します。数名の生徒の作品を全体に共有したり、つくったリズムパターンをペアで聴き合ったりしながら、自分の作品の工夫したところ、おすすめのところを提出シートにまとめ、授業を振り返りました。

本大会の研究協議は小学校部会、中学校部会ともにグループワークの形で行われ、公開授業の内容に加え、本大会の研究の視点3項目や本大会における研究内容について、成果やアイデア、質問などを、参加された先生方が熱心に協議・発表する姿が見られました。

全体講評(1日目)

同日午後には旭川市民文化会館にて、開会行事、研究概要発表に続き、文部科学省初等中等教育局視学官の志民一成先生と、同教育課程課教科調査官の河合紳和先生による全体講評が行われました。

幼稚園・小学校部会については志民先生が、「音や音楽を形づくっている要素を捉えていくことが、「音楽的な見方・考え方」を働かせるという深い学びの視点からの授業改善につながる鍵となります。子どもたちが実際

に授業の中で、教師が想定した音楽を形づくっている要素を根拠として表現を工夫したり、音楽や演奏のよさを見出したりすることができていたかについて検討し、今後の授業改善の視点として生かしていただきたいと願っております。」と述べられました。また、公開授業の学習指導案の最後に、「努力を要する」状況と判断される児童への働きかけについて記載されていることについては、「ここがまさに“授業改善のための指導と評価の一体化”の核心となり、令和の答申で示された個別最適な学びのうち、特に指導の個別化を具現化するうえで最も重要なものだと考えます。ここに想定された働きかけが有効なものであったかどうかを検証し、個別最適な学びの充実に向けた取り組みについて考えを深めていただければと考えます。」と述べられました。

河合先生は中学校・高等学校部会の講評に続き、「本大会では、多くの先生方が公開保育、公開授業等を通して、幼稚園教育要領あるいは小・中学校、高等学校の学習指導要領の趣旨を踏まえた指導や評価のあり方について、さまざまな提案や提言をくださいました。(中略)本大会の成果を、皆様お一人お一人がご自身の立場に立って捉え、明日からの音楽教育に生かしていただくことをご期待申し上げます。」と締めくくりました。



開会行事の様子



記念講演に登壇された松下 耕先生



北海道教育大学附属旭川小学校、旭川市立西御料地小学校による小学生合唱



北海道旭川商業高等学校による高校生吹奏楽

全体会（2日目）

2日目の全体会も旭川市民文化館で開催されました。作曲家の松下 耕先生による記念講演「子どもと合唱すること」では、「教える義務」「教えない勇気」という視点から、松下先生の合唱教育論を踏まえて、これまでの人生を振り返りつつ今の子どもたちとどのような合唱を共有しているのかについて語られました。

続く記念演奏は「ここからはじまる…」を主題に、8つのプログラムが披露されました。まずは5つの中学・高等学校による中高吹奏楽ファンファーレ『金管ファンファーレ1』（作曲：建部知弘）。続いて、旭川志峯幼稚園の園児合唱『歌えバンバン』（作曲：山本直純／作詞：阪田寛夫）、東川町立東川小学校と旭川市立永山西小学校による小学生吹奏楽『北の国から』（作曲：さだまさし／編曲：小島里美）、『ジンギスカン』（作曲：R. シーゲル／編曲：小島里美）、北海道教育大学附属旭川小学校と旭川市立西御料地小学校による小学生合唱『First Flight』（作詞・作曲：富澤 裕）、4つの中学校による中学生吹奏楽『北の舞～もしもゴジラが北海道に上陸したら』（作編曲：藤田崇文）、6つの中学校と4つの高等学校による中学生・高校生合同合唱『ほらね、』（作曲：まつしたこう／作詞：いとうけ

いし）、北海道旭川商業高等学校による高校生吹奏楽『天国の島』（作曲：佐藤博昭）、『田園』（作曲：玉置浩二／編曲：佐野 聡）など、開催地北海道にゆかりのある楽曲や器楽アンサンブル作品を含む全11曲が披露されました。トリには出演者合同合唱『あなたがどこかで』（作曲：玉置浩二／作詞：松井五郎／編曲：安全地帯／合唱編曲：泉修）が堂々演奏され、全国大会は幕を下ろしました。

終わりに

今年度の旭川上川大会から、第2期全国大会の「継続研究の視点3項目」①主体的・対話的で深い学びの視点に立った授業改善、②生活や社会の中の音や音楽の働きについての意識や、音楽文化についての理解を深める学習の充実、③授業改善のための指導と評価の一体化が示されました。昨年の富山大会に劣らず賑わいを見せた今大会。各公開授業や研究協議に臨まれた先生方の姿を拝見し、これらの項目を視野に入れた授業や研究が、次の全国大会、そして未来の音楽教育へとつながっていくことを実感する2日間となりました。

次回、全日本音楽教育研究会全国大会は、2025年10月23日・24日に佐賀県で開催されます。（ヴァン編集部）



コンサートの様子

花火の歌に思いをのせて

～弓削田健介さんと能登の子どもたちによる「いのちと夢のコンサート」

日本海に面し豊かな自然に囲まれた石川県能登半島は、2024年1月1日に発生した能登半島地震により甚大な被害を受けました。地震や豪雨、相次ぐ自然災害に見舞われながらも、町の人々は懸命に復旧・復興へと歩みを進めています。本記事では、合唱作曲家の弓削田健介さんが、2024年9月30日から10月2日にかけて被災地域の小・中学校を巡り行ったスクールコンサート（特別版）「いのちと夢のコンサート」の様をお届けします。

「いのちと夢のコンサート」は、令和6年能登半島地震及び令和6年奥能登豪雨で被災した地域の子どもたちに、音楽を通じて元気になってもらいたいという弓削田さんの強い思いにより実現しました。3日間で5つの学校（珠洲市立宝立小中学校、穴水町立穴水小学校、能登町立松波小学校、輪島市6小学校、輪島市立門前中学校）を周り、キーボードの弾き語りとお話を組み合わせながら「いのち」と「夢をもつこと」の大切さを伝えるコンサートを開催。また、特別版であるこの公演では、子どもたちから募ったさまざまなメッセージをもとに合唱作品をつくる「歌づくりプロジェクト」が実施され、およそ300人の児童生徒が参加しました。



珠洲市立宝立小中学校 小学校1～6年生（1日目）

歌には「メッセージ」が隠れている

コンサートは弓削田さんの弾き語りによる『ハナミズキ』（作詞：一青窈^{ひとあや}、作曲：マシコタツロウ）からスタートしました。演奏後、弓削田さんはこの歌で作者がいちばん伝えたい部分はどこかを子どもたちに問いかけ、繰り返し現れる歌詞「君と好きな人が百年続きますように」に思いが込められていることを気付かせます。このように「歌にはつくった人の“メッセージ”が隠れている」ことを伝えると、続いて届けたいメッセージ・ソングとして『Believe』（作詞・作曲：杉本竜一）を歌唱。映像では、音楽に合わせて東日本大震災で被災した東北の子どもの様子なども映し出されました。真剣に見入っている様子だった子どもたちも、弓削田さんの声につられるかのように自然と口ずさみはじめ、曲終盤には立ち上がって全員で歌う場面も見られました。

音楽でつながる

コンサートの中では、弓削田さんが全国を旅しながら継続的に行っている活動（スクールコンサートや講演会）についても紹介されました。活動において弓削田さんが大切にされているのは、「出会い」と「つながり」です。弓削田さんは、「であいであいであい……」と並べた言葉をスクリーンに映し、「たくさんのお会いの中に何が隠れている？」と問いかけます。子どもたちが「あい」や「あいであ」という言葉を見つけると、旅のエピソードを交えて「出会い」の経験を振り返りました。そして、旅の中で出会った「あい（想い）」と「あいであ（インスピレーション）」から生まれた歌『世界を旅する音楽室』（作詞・作曲：弓削田健介、教科書「小学生の音楽4」に掲載）のコーナーへ。海外に住む子どもたちと交流しながら歌った動画が紹介されると、聴いている子どもたちも音楽によって体を揺らしたり、曲を知っている学校では弓削田さんと一緒に元気よく合唱したりして楽しみました。弓削田さんは、『世界を旅する音楽室』のようにいろいろな場所で多くの人が歌えるような歌をつくりたい、音楽で能登のみならず、そして能登から日本中、世界中へ発信したいと歌づくりへの協力を子どもたちに呼びかけました。

花火のチカラでみんなと元気に

歌づくりプロジェクトのテーマは「花火」です。きっかけとなったのは、2024年8月に珠洲市宝立町で開催された震災犠牲者の追悼イベント「花火 いのちの輝き」でした。弓削田さんは、亡くなられた家族や友人へのメッセー



穴水町立穴水小学校 3・4年生（1日目）



能登町立松波小学校 1～6年生（2日目）



輪島市6小学校（2日目）ここでは、輪島市内の6つの小学校（河井小、鳳至小、鶴巣小、大屋小、三井小、河原田小）の3年生が参加した。



輪島市立門前中学校 1～3年生（3日目）



弓削田さんの活動に興味津々な子どもたち



歌づくりの協力を呼びかける弓削田さん

ジが書かれた花火玉が空に打ち上がる景色を現地で地元のかたがたと見つめながら、作曲家として自分ができることは何かを考えたと言います。宝立地区だけでなく、輪島地区でも被災した高校生たちが復興祈願の花火を打ち上げるプロジェクトを行っていたことを知り、能登の子どもたちと「花火」に思いをのせる歌づくりを行いたいと企画を思い立ったそうです。

日本には古くから花火に祈りや願いを込めて空に打ち上げる文化があります。日本三大花火の一つとされる新潟県の「長岡まつり大花火大会」では長岡空襲の慰霊や平和への祈りを込めて、1947年から80年近く花火の打ち上げが続けられています。また、新潟県中越地震の翌年(2005年)からは震災からの復興を祈願したプログラム「フェニックス花火」が始められ、多くの人々からの支援金により毎年壮大な打ち上げ花火が行われています。その支援の輪は広がり、東日本大震災が起こった年には、宮城県石巻市でも「フェニックス花火」が打ち上げられました。

「フェニックス」はエジプト神話を起源とする伝説上の鳥のことを指し、何度もよみがえることから永遠の時を生きる象徴として知られています。弓削田さんは、花火をイメージしながら復興と再生の願いを込めて、

この名を冠した一つの歌をつくりました。1番のみ制作された『フェニックス』を能登の子どもたちに聴いてもらい、感じたことや、歌で伝えたいメッセージ、元気が出る言葉、つくってほしい曲の雰囲気など、さまざまな感想やアドバイスをもらうというのが、今回の歌づくりの内容です。また、「つながる」ことがねらいでもあるこのプロジェクトには、長岡市の子どもたちも参加しています。弓削田さんが事前に協力を呼びかけ、新潟県中越地震からの復興の歴史や花火の歴史を学んでいる長岡の小学生から、曲についての意見をもらったほか、能登の子どもたちに向けて「花火の歌ができれば一緒に歌おうね」、「一緒にがんばろう」といった応援のメッセージが寄せられました。

子どもたちは弓削田さんの演奏やお話にじっくりと耳を傾けたあと、配られたワークシートに思い思いの感想を書き込みます。「もっと明るく、一緒に歌って楽しくなるような感じにしたい」、「『がんばれ』『1人じゃない』『笑顔』といった言葉を入れたい」などの率直な意見や、「できあがったら地域の人に聴いてもらいたい」、「フェニックスのように希望をなくしたくない、あきらめない」といった願いがつつられました。



『Believe』を一緒に歌う様子



『フェニックス』について意見を交流する様子



『フェニックス』を歌う弓削田さん



長岡の子どもたちからのメッセージ



ワークシートに思いをつづる子どもたち



花火の歌ができました！

コンサートを通して集めたメッセージを基に、弓削田さんと、能登と長岡の児童生徒による3つの歌が誕生しました。

- 『ゆめはなび』(斉唱)
- 『HANABI』(同声二部合唱)
- 『フェニックス』(混声三部合唱)

どの年代の子どもたちにも楽しく歌ってもらいたい、子どもたちだけでなく多くの人の心に届き、ずっと大切に歌い継いでもらえるようにという弓削田さんの思いが詰まった作品です。(※『ゆめはなび』『HANABI』は、本誌P.30～「参考楽譜」に掲載しています。)

能登半島の一部地域ではいまだがれきが残り、仮設住宅や仮設校舎での生活が続いている状況です。しかし、そのような中でも子どもたちが生き生きと過ごし、弓削田さんの演奏やお話に目を輝かせながら参加している姿が印象に残っています。その明るく屈託のない笑顔は、復興への大きな希望に感じられました。弓削田さんと子どもたちが思いを込めたこの歌を通して、多くの人が出会いつながっていくとともに、子どもたちの笑顔がこの先も続いていくことを強く願います。(ヴァン編集部)

コンサートに参加して

珠洲市立宝立小中学校 坂瀬孝子 先生・平元ひな 先生

「子どもたちと一緒に歌づくりがしたい」とお話をいただき、どんなコンサートをしていただけるのか楽しみにしていました。最後に書いたワークシートには、子どもたちのいろいろな思いが書かれていました。すてきな音楽や楽しいお話から、子どもたちがたくさんを感じ、前向きな気持ちが湧いてきたことが伝わってきて、私たちもとてもあったかい気持ちになりました。

穴水町立穴水小学校 教頭 坂本香織 先生

聴いているときも歌っているときも、子どもたちがすごくいい表情をしていたのが印象的でした。本校は震災後、近隣の中学校に間借りして学校を再開し、ようやく仮設校舎に移ってきました。こういう状況でしたので、今回の経験はきっと子どもたちの心に残るものだったと思います。子どもたちがもう少し大きくなったときに、ほんとうに音楽を楽しめる状況で、自由に声を出してこの歌を合唱できたらすてきだなと思います。

音楽診断

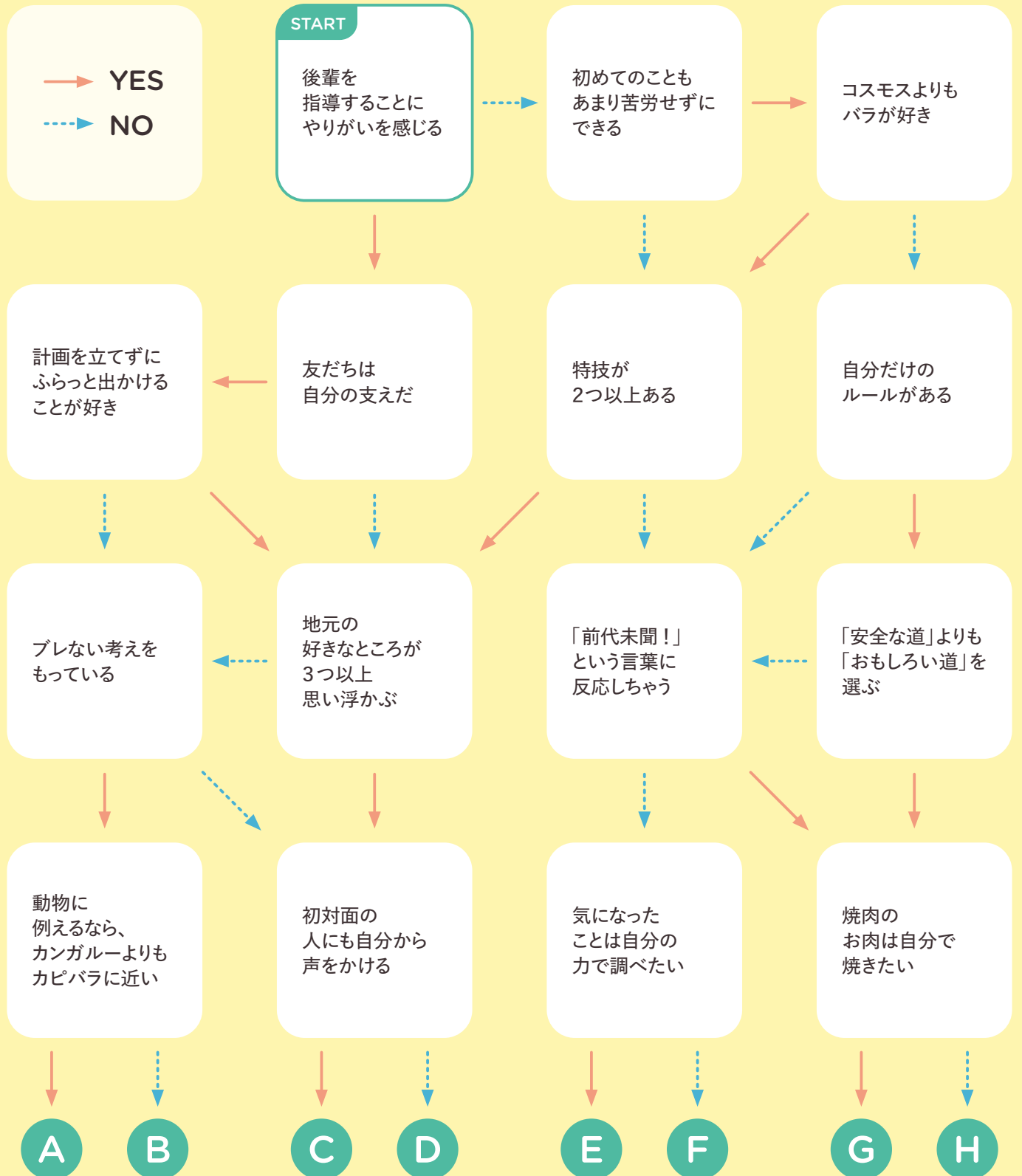
Kyogei Presents

第22回 意外な一面をもった作曲家編



『ヴァン』オリジナルでお届けする音楽診断企画の第22弾のテーマは、「意外な一面をもった作曲家」です。作曲以外にも趣味や仕事を極めた作曲家8人の中から、あなたに似ているタイプの作曲家をご紹介します。

監修・解説 = 山田治生 Text = Haruo Yamada



A 信念を貫き追求する研究者タイプ
メシアン (1908~1992)

メシアンは、パリの聖トリニテ教会のオルガン奏者を務め、カトリック信仰に基づく作品(「キリストの昇天」や「我らの主イエス・キリストの変容」など)を残したが、その一方で、鳥の声を好み、それらを採譜し、作品のなかに取り入れた。代表作に「鳥たちの目覚め」、「異国の鳥たち」、「鳥のカタログ」など。その後、鳥類学も学んだ。



B 知性と品性を兼ね備えた天才肌
メンデルスゾーン (1809~1847)

メンデルスゾーンは多才な人だった。語学が堪能で、文学に造詣が深く、絵も上手。いくつもの水彩画を残しているが、その多くが美しい風景画である。彼は、交響曲第3番「スコットランド」、同第4番「イタリア」、演奏会用序曲「フィンガルの洞窟」、演奏会用序曲「静かな海と楽しい航海」などを作曲し、音楽でも「音の風景画家」と呼ばれることがある。



C 好きなものに対する熱量は誰にも負けない
ドボルザーク (1841~1904)

ドボルザークはチェコを代表する作曲家。ニューヨークの音楽院の院長を務めるためにアメリカにも滞在した。彼は、かなりの蒸気機関車オタクで、時刻表を暗記し、駅まで汽車を眺めに行くのが日課だった。交響曲第9番「新世界より」の第4楽章冒頭は、蒸気機関車が発車する(加速していく)様子が描かれているともいわれる。

※高等学校の教科書では、ドヴォルジャークと表記します。



D 頭脳明晰で心優しい
ボロディン (1833~1887)

ロシアのボロディンは医科大学で学び、西欧で化学の研究を行い、サンクトペテルブルク大学教授となった。「アルドール反応」や「ハンスディーカー反応(ボロディン反応)」の発見者として名を残す。30歳の頃にバラキレフにつくまで、音楽を正式に勉強したことがなかった。35歳で交響曲第1番を発表。代表作は交響曲第2番と未完のオペラ「イーゴリ公」。



E 多才でコミュニケーション力抜群
ガーシュイン (1898~1937)

「ラプソディ・イン・ブルー」や「パリのアメリカ人」などの名曲を書いたほか、ミュージカルで大成功を収め、一躍、裕福になったガーシュインは、ピバリーヒルズにテニスコート付きの自宅を買い、近所に住むシェーンベルクらを招いて、テニスに興じた。また、シェーンベルクとは、絵画でも趣味が一致し、彼の肖像画を描いたりもした。



F 好奇心と探究心あふれる享楽型
ロッシェニ (1792~1868)

「セビリアの理髪師」や「チェネレントラ」などの人気オペラを作曲したロッシェニは、「ウィリアム・テル」を最後に37歳でオペラの筆を折り、残りの人生は、たまに小さな曲を書くくらいで、美食家として悠々自適に暮らした。「牛ヒレとフォアグラのロッシェニ風」など、フランス料理のメニューにその名を残している。



G 独自の世界観とチャレンジ精神をもつ革新者
ケージ (1912~1992)

音を出すことなく時間が過ぎ去る「4分33秒」などの前衛的な音楽で知られるケージ。アメリカ人の彼は、インド、中国、禅など東洋の思想に影響を受け、西洋音楽の枠組みを越える、偶然性の音楽を書いた。彼は、キノコ研究に熱心だったが、その理由の一つは辞書でmusicの前の言葉がmushroomであるからだといわれている。キノコは彼の創作にも影響を与えた。



H 仕事も趣味も新しいことに果敢に挑む両立型
アイヴズ (1874~1954)

アメリカ人のアイヴズは、友人とともに保険会社を起業し、大きな成功を収めた。作曲は本業の傍らの趣味。アカデミズムから離れ、既成の作曲技法にとられない斬新な音楽(民謡を採り入れたり、分かりやすい側面もある)を作り、その作品はなかなか理解されなかった(交響曲第2番~第4番は、作品が作られてから初演まで30~50年を要した)。



山田治生(音楽評論家)

1964年、京都市生まれ。1987年、慶應義塾大学経済学部卒業。著書に『トスカニーニ 大指揮者の生涯とその時代』、小澤征爾の評伝である『音楽の旅人 ある日本人指揮者の軌跡』、『いまどきのクラシック音楽の愉しみ方』(以上、アルファベータ)、編著書に『戦後のオペラ』(新国立劇場運営財団情報センター)、訳書に『レナード・バーンスタイン ザ・ラスト・ロング・インタビュー』(アルファベータ)などがある。



研究大会

6月

June

20日(金)

第67回 近畿音楽教育研究大会 兵庫大会
神戸国際会館「こくさいホール」他

〈大会主題〉

「音楽の学びがつなぐ 音・人・未来」

[問い合わせ]

神戸市立東灘小学校 校長 高原良幸

〒658-0013 神戸市東灘区深江北町2丁目4番1号

TEL 078-411-0556 / FAX 078-411-0557

yos-takahara@kobe-c.ed.jp

11月

November

7日(金)

第67回 関東甲信越音楽教育研究会
埼玉大会(戸田大会)

戸田市文化会館 他

〈大会主題〉

アナログ×デジタルで進化(深化)する
音楽の授業における個別最適&協働的な学び

[問い合わせ]

埼玉大学教育学部附属小学校 三橋博道

〒330-0061 埼玉県さいたま市浦和区常盤6-9-44

TEL・FAX 048-833-6956

onkyouren@gmail.com

10月

October

23日(木)・24日(金)

令和7年度 全日本音楽教育研究会全国大会
佐賀大会(総合大会)

第66回 九州音楽教育研究大会 佐賀県大会

第26回 佐賀県音楽教育研究大会 佐賀・小城・多久地区大会

佐賀市文化会館 他

〈大会主題〉

育てよう 音楽と豊かに関わる子ども

～音楽科及び芸術科音楽における

「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善と

「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を通して～

<https://saga-ken-on-ken.jimdosite.com>

[問い合わせ]

佐賀市立城北中学校 校長 末次知子

〒849-0921 佐賀県佐賀市高木瀬西三丁目1番50号

TEL 0952-30-9258

suetsugu-tomoko@education.saga.jp

7日(金)

第73回 東北音楽教育研究大会 福島大会

ふくしん夢の音楽堂 他

〈大会主題〉

かがやく瞳・きらめく音・ときめく心を育む音楽の学びを求めて
～音楽科授業において「主体的に学習に取り組む態度」をどう評価するか～

[問い合わせ]

福島市立平野中学校 校長 佐藤裕子

〒960-0231 福島市飯坂町平野字館ノ前3-3

TEL 024-542-3074 / FAX 024-543-0652

head.hirano-j@fcs.ed.jp

14日(金)

第56回 中国・四国音楽教育研究大会 鳥取大会

とりぎん文化会館 他

〈大会主題〉

おんがくっていいな!

～つなげよう拓こう未来を 音の心で～

[問い合わせ]

鳥取市立桜ヶ丘中学校 教頭 山内かおり

〒680-0853 鳥取県鳥取市桜谷227

TEL 0857-22-8301 / FAX 0857-22-8302



教育芸術社ウェブサイトでは、
この他の研究大会やイベントなどの
情報も掲載しています。

https://www.kyogei.co.jp/data_room/event/

20日(木)・21日(金)

第19回 東海北陸小中学校音楽教育研究大会
岐阜大会

第35回 岐阜県音楽教育研究大会
岐阜市民会館 他

〈大会主題〉

楽しさと確かさの中に美しさを求める子をめざして
～子どもの可能性を引き出す音楽科の授業～

[問い合わせ]

岐阜市立島小学校 校長 野原美登里

〒502-0911 岐阜県岐阜市北島7-6-12

TEL 058-231-2392 / FAX 058-231-2356

<https://qifuxianxiaozhongxuexiaoyinlekeyanjiubuhui0.webnode.jp/>

12月

December

5日(金)

第67回 北海道音楽教育研究大会 札幌大会

札幌市教育文化会館 他

〈全道共通主題〉

音楽のよさを分かち合い 確かな力を育む音楽教育

[問い合わせ]

札幌市立新川中央小学校 校長 鈴木秀和

〒011-0923 札幌市北区新川3条3丁目2-1

TEL 011-761-1511 / FAX 011-761-9607

hidekazu.suzuki@sapporo-c.ed.jp



Spring Seminar

スプリングセミナー 2025

— 新作合唱曲による公開講座 —

コンクール自由曲向けの新曲発表会「スプリングセミナー2025」を開催いたします。

同声・女声・混声の作品を作曲家、司会者、合唱団と学びます。

※詳細や最新情報は弊社ウェブサイト等でご確認ください。

●日程：2025年3月29日(土)

●会場：横浜みなとみらいホール 小ホール

●司会：藤原規生

●作曲家：[同声] 山下祐加、三宅悠太
[女声] 鷹羽弘晃、大熊崇子
[混声] 根岸宏輔、土田豊貴

●合唱団：八千代少年少女合唱団
(指揮：長岡亜里奈)
おうたや
(指揮：田中エミ)
ユースクワイア アルデbaran
Youth Choir Aldebaran
(指揮：佐藤洋人)

●セミナー終了後、三宅悠太先生による合唱ワークショップを行います。

●お問い合わせ：

株式会社教育芸術社

スプリングセミナー実行委員会

TEL 03-3957-1168

FAX 03-3957-1740

<https://www.kyogei.co.jp/spring-seminar/>



最新情報は弊社ウェブサイト
で随時公開いたします。

<https://www.kyogei.co.jp/spring-seminar/>



最新情報は、スプリングセミナーの
Facebookでも発信いたします。

<https://fb.me/kgspringseminar/>

内容は予告なしに変更となる場合がございます。

詳細は
こちら



編集後記

音楽でつながることのすばらしさをあらためて感じた能登のスクールコンサートでは、終演後に子どもたちが弓削田さんのもとへと駆け寄る姿が印象的でした。短い時間の中で両者が心を通わせたことを感じるとても温かな瞬間です。弓削田さんは、震災の爪痕残る現地と、そこで元気に過ごす子どもたちに万感の思いを滲ませながら、「子どもたちの力を借りて、ともに元気になっていけたら」と語られました。

「作品には小さな光を宿したい。あともう1日、光を信じて生きてみようと思ってもらえるような——」巻頭インタビューにおける覚 和歌子先生の言葉が心を打ちます。歌には作者の言葉と思いが込められています。「いのちと夢のコンサート」を経て完成した3つの合唱曲が、能登と長岡、そして全国の子どもたちに元気を与えてくれることを願っています。

お忙しい中、取材や執筆、編集にご協力を賜りました全ての方に、心より厚く御礼申し上げます。今後ともご支援くださいますよう、お願い申し上げます。

表紙・巻頭イラストレーション
たかなかな

写真撮影
島崎信一 (STUDIO S+PLUS)

写真提供
藤原道山
弓削田健介

イラストレーション
小澤一雄
橋本金夢

表紙デザイン・本文組版
STORK

音楽教育 ヴァン



発行者 株式会社 教育芸術社
(代表者 市川かおり)
〒171-0051 東京都豊島区長崎1-12-14
TEL. 03-3957-1175(代)
FAX. 03-3957-1174
https://www.kyogei.co.jp/
©2025 by KYOGEI Music Publishers. ©-25
本書を無断で複写・複製することは著作権法で禁じられております。

*ヴァンは“vent”はフランス語で「風」。
新しい音楽教育の地平を切り開いていく
願いを込めています。



Recommend

New Song ライブラリー【同声編⑤】 小学生のためのクラス合唱新曲集 ぼくの風船

- 入学式から卒業式までさまざまな場面で歌える魅力的な22曲。作者によるメッセージを全曲掲載!
- 定価1,650円(本体1,500円+税10%) / B5判 / 88ページ
- ISBN978-4-86779-002-1

準拠CD (別売り)

- 価格3,080円(本体2,800円+税10%) / 1枚
- GES-16004



New Song ライブラリー【混声編④】 クラス合唱新曲集 心の声

- 授業や校内合唱コンクール、行事に...レパートリーが広がるシリーズ第4弾!
- 定価1,760円(本体1,600円+税10%) / B5判 / 104ページ
- ISBN978-4-86779-065-6

準拠CD (別売り)

- 価格3,080円(本体2,800円+税10%) / 1枚
- GES-16058



Chorus ONTA Vol.29

- 授業に、音楽会に、コンクールに、さまざまな合唱活動で高い評価をいただいている混声合唱のためのパート練習用CD第29弾!
- 収録曲: 道を歩けば / 瞳をとじて見えるもの / 14 -fourteen- / 懐かしい未来 / タイムリバー / 桜、いってきます / 虹 / Chessboard / ことばを追い越して / 前に
- 価格13,200円(本体12,000円+税10%) / 4枚組
- KGO-1209~1212



2025年1月
発売予定

音楽の鑑賞資料と基礎学習

- 西洋音楽だけでなく、日本音楽や世界の諸民族の音楽、日本の歌についての解説も充実した「鑑賞資料」と、音楽の基礎が身に付き自学自習もできる「音楽の基礎知識とその問題集」で構成されています。巻末には授業でも使える「合唱曲チェックシート」「鑑賞記録ノート」「五線ノート」なども掲載!
- 定価900円(本体818円+税10%) / B5判 / 128ページ
- ISBN978-4-86779-110-3



2025年2月
発売予定

増補改訂版 音楽史を学ぶ

古代ギリシアから現代まで

久保田慶一 編著

- 高等学校の鑑賞用副教材や大学などのテキストに最適な音楽史の新刊です! 増補改訂版では、現行本では十分な記述がなかったアメリカ音楽史を大幅に加筆し、さらに2019年末頃からはじまったコロナ・パンデミックなど近年の状況についての説明も追加しました。
- 定価990円(本体900円+税10%) / B5判 / 216ページ、カラー口絵 4ページ
- ISBN978-4-86779-067-0



オリジナル合唱ピース

- クラス合唱や全校集会、コンクール自由曲向けの作品です。
- 【同声編94】はじまりはひとつのことば(覚 和歌子 作詞 / 三宅悠太 作曲)
- 【女声編54】ありったけの夏(覚 和歌子 作詞 / 横山潤子 作曲)
- 【女声編61】ふゆはたまもの(覚 和歌子 作詞 / 横山潤子 作曲)
- 【混声編108】ひとめぐり-混声合唱とピアノのための-(覚 和歌子 作詞 / 三宅悠太 作曲)
- 各定価660円(本体600円+税10%) / B5判



小学校・中学校・高等学校教科書訂正のお知らせ



教科書及び指導書の訂正を当社ウェブサイトに掲載しています。誠に恐れ入りますが、ご確認のうえ、ご指導の際にはご留意くださいますようお願い申し上げます。

教育芸術社 LINE公式アカウント



ぜひお友だち登録
してください♪

はじめました!